

2000-14



エズラ・F・ヴォーゲル氏(Vogel, Ezra F.)
ハーバード大学教授。東アジア研究センター前
所長。元・米国国家情報会議(NIC)東アジ
ア太平洋担当上級専門官。1930年生まれ。58年
オハイオ・ウェスレイアン大学卒。ハーバード
大学大学院修了。専攻は日本研究・中国研究。

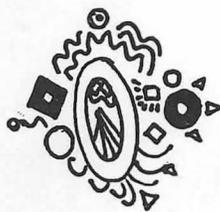
アメリカ外交が日本より優れているのは
アカデミズムが現実政治に参画しているからだ
その代表で、日中を知る社会学者、ヴォーゲル氏に
米中を知る社会学者、橋爪氏が切り込む

橋爪大三郎 エズラ・F・ヴォーゲル



橋爪大三郎氏
東京工業大学大学院社会理工学研究科教授。
1948年神奈川県生まれ。72年東京大学文学部社
会学科卒。77年同大学大学院社会学研究科社会
学専攻博士課程修了。現在、ハーバード大学ラ
イシャワー日本研究所の客員研究員。

対談 米中新時代と 日本



はじめに

日本の外交の欠点だと昔から言われているのは、国際関係をシステムとしてとらえられないことだ。日米外交、日中外交、日ソ外交など、二国間関係の寄せ集めで外交ができてい
る。中ソ関係が変化したら米中関係はどう動くか、といった
連立方程式を考えるのが苦手なのだ。

アメリカの外交が超一流だとは言わないが、日本よりまし
なのは、専門家の議論をきちんと踏まえていることである。

私が客員として滞在中のハーバード大学には、クリリッ
ジ・ホールという建物がある。ここに国際関係の研究所が集
まっており、アジア、ロシア、中東など地球の半分ぐら
いカヴァーしている。毎週山のように研究会があり、各国の最
新情勢の分析、政策提言など、実際に即した活発な議論が交
わされる。全米にこうした拠点が何十もあるのだから、アメ
リカ外交のすそ野の広さが知れよう。

さまざまな国や文明の複合である国際社会の全体を、ひと
りの頭に収めるのは無理である。そこで各地域の専門家を育
て、彼らに繰り返し公開で議論させて、国益のありかを探り、
世論にも働きかける。そこからおのずと、客観性をもった外
交政策が組みあがる。外務省が外交を独占する時代ではない
のだ。

ハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル教授は、こうしたア
メリカ有数の専門家の一人。著名な社会学者で、日本研究、
中国研究の大御所でもある教授は、一九九三〜九五の二年
間、国家情報会議の東アジア太平洋担当上級専門官をつとめ、
クリントン政権の東アジア政策決定に参画した。私がヴォー
ゲル教授を訪ねることにしたのは、教授の学識に触発されたい
という思いもさることながら、アカデミズムと現実外交が
活き活きとした緊張関係で結ばれているアメリカの雰囲気、
日本の読者に伝えたいと考えたからだ。

対談は、教授自宅の応接間で、ゆったりとした雰囲気に進
められた。同じ社会学者同士ということもあり、話題は、ヴ
ォーゲル教授の社会学修業時代からスタートし、日本研究、
中国研究、アメリカの対アジア外交へと発展していった。
(橋爪)

日本との出会いは見合い結婚

橋爪 教授は、社会学「黄金時代」のハーバード大学で学ば
れたのですね。

ヴォーゲル 当時はね、社会関係(ソーシャル・リレーション
ズ)学科というのがあって、社会学、社会心理学、臨床心理
学、社会人類学が一緒だった。それを私はみな勉強しました。

2000-14

研究テーマは社会学の家族問題を選びました。博士論文は「情緒障害児と両親の夫婦関係」。

私の考え方の根本は、指導教授だったタルコット・パーソンズの、社会システム論です。それは、社会全体と、経済・政治・コミュニティ・価値観……の構造が相互に関連していると考えられる学問です。橋爪 パーソンズは、構造機能分析の創始者ですね。社会学にこだわらず、関連する学問をすべて学ぶのはすばらしいと思います。それで、パーソンズ社会学に満足されましたか？

ヴォーゲル パーソンズの社会学は政治や経済など、幅広く社会の構造を考えていく。社会全体をシステムとしてとらえるのに役立つと思いました。ただパーソンズは理論家なので、本を読んで研究する。いつばう私は、社会調査をやりたいと思った。そこで日本に行って、政治や経済や家族を含む、日本社会をまるごと研究することにしたのです。

橋爪 それは、いつごろですか？

ヴォーゲル 二十八歳で博士号を受け、それから日本に二年間滞在したので、一九五〇年代末ごろです。はじめの一年間は日本語の勉強ばかり。翌年は、千葉県市川市に住んで、家族調査を行い、あとで『日本の新中産階級』（六三年）という本にまとめました。

橋爪 なぜ日本を選んだのでしょうか？
ヴォーゲル 日本との出会いは、たとえば言うところ、恋愛結婚ではなくて見合い結婚でした。日本が好きとかでなくて、それまで関係なかった。比較研究するのに、アメリカとヨーロッパは似すぎていて面白くない。当時、欧米を除くと産業社会は、日本しかない。それで日本を選びました。見合いのあと、好きになった。橋爪 日本の知識人も、すぐ欧米と日本を比較したがるのですが、比較はじつはとてもむずかしいことだと思えます。

ヴォーゲル その通りです。市川市で家族研究をしたのが一九五八年。小学校の校長先生の紹介で、PTAの六軒の家族を毎週訪問しました。最初は家族生活や

人間関係、ものの考え方、政治や経済に対する見方、親戚や近所づきあい、学校の役割といった基本的なことを調べました。アメリカの日本研究者は、政治や経済に詳しくても、実際の日本社会を知らない人が多い。でも私は、夫婦で市川市に住み込み、家族ぐるみで地元の人びとと交流しました。いまでも友だちづきあいが続いているんですよ。

橋爪 家族は、感情や人間性があらわになる、社会関係の原点ですね。そこから出発していることで、ヴォーゲル先生の学問には深みが出ていると思います。
ヴォーゲル 私がハーバードで日本について教え始めたのは、六九年からです。日本研究を担当していたR・ペラー教授がパークレーに転出したので、私が後にすわりました。それまで六四年から四年間は、中国について教えていました。

日本について教えることになったので六九年に日本に行き、政治や経済の勉強をしました。社会学の野田一夫さんの紹介で、政界・経済界・官界のいろいろなはまだ冷戦で、日本はかけがえのない同盟国だった。でもソ連が解体し中国が台頭して、日本の位置づけも変わったのではないのでしょうか。

ヴォーゲル 大学生は敏感で、八〇年代は日本が人気を得ましたが、最近では中国の将来性が買われています。政府内では、国防省、商務省、USTR（米通商代表部）が対日政策を仕切っていたのが、七年の金融危機を境に、財務省の発言力が増した。でも、アメリカの子どもたちは日本の創造性を理解していますね。玩具の「たまごっち」、アニメ、ポケモンは大人気です。ゲーム機は日本製、寿司などの日本食もアメリカに定着した。

橋爪 八〇年代までの日米安保に代わって、九〇年代はアメリカの関心が経済同盟に移ったということなのでしょう。ヴォーゲル いや、安全保障も大切だ。九四年からワシントンで、ジョゼフ・ナイ国務次官補をはじめ、私たち担当官は日米同盟を新しい時代に即したものにすするため努力した。日米同盟はもはや、敵

人びとと会って調査をしました。

橋爪 人類学の調査方法ですね。ヴォーゲル先生は人間がお好きなんですね。ヴォーゲル 社会学者は統計を使うけれど、私は、数字よりもっと深く社会をとらえたいと思ったのです。あとハーバード大学には、外務省など官庁や大学から優秀な日本人が大勢やってきます。これもよい勉強のチャンスでした。

アメリカの日本観は変わったか？

橋爪 日本は六〇年代、七〇年代と急成長をとり、経済大国になりました。そこでいち早く『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（七九年）を著されましたね。ヴォーゲル 日本は毎年訪れていました。七五年に再び一年間滞在した。そして、この一五年間の変化に目をみはり、日本はまだ伸びると思ったのです。本が出たらライシャワー教授に「アメリカ人には必読だが、日本では出版禁止にすべきだ」と冗談を言われました。あ

に對するものではない。中国を敵とは、思わない。ただこの地域の国家關係が不安定だと、軍拡競争をまねく恐れがある。そこで不確実さをなくすため、この同盟が必要なのです。一般の国民には理解しにくいだろうが、専門家たちはそう考えている。

橋爪 とくにナイ国務次官補は、東アジアに引き続きアメリカのプレゼンスが必要だとはつきり述べ、ガイドラインも改定した。でも日本側は、このメッセージをはつきり理解できていないのでは？

ヴォーゲル 外務省や自衛隊もよく理解しているし、いろんな機会に会った政治家たちもわかつていたと思います。

橋爪 政府の人間がわかつていて一般の国民が理解していないというのは、日本の民主主義のために心配ですね。

ヴォーゲル まったく同感です。

文化大革命を歩く

橋爪 先生はながらく、日本ウォッチャ

ーの役割を果たしているわけですが、同時に中国ウォッチャーでもあられる。両方を兼ね、両国語に堪能な学者は、先生の世代でほかに思いつきませんが……。

ヴォーゲル 私も思いつきません。両国語ができる人は国務省にも数人いる。でも、日中の社会を両方とも研究しているのは私ひとりだと思います。

橋爪 私も中国語を勉強していますが、日本、中国、アメリカの三国を比較すると、二国間だけの比較ではえられない、質の高い情報が手に入ると思います。

中国とは恋愛結婚ですか、それとも、見合い結婚ですか？

ヴォーゲル アハハ(笑)。やはり見合い結婚なんですよ。六〇年に日本から戻って一年間、エール大学で家族社会学を教えた。ちょうどそのころ、ハーバード大学で中国研究者を集めていました。五〇年代はマッカーシズムで、共産党との接触は要注意。中国の政治、経済、社会を研究する人はまれだった。六〇年代には財団も金を出すようになり、若手に中国

語を学ばせる奨学金制度ができた。ある教授に、君は中国を研究するかねと聞かれ、すぐやると決めました。中国のことは知らなかったが、日本と両方やれば面白いと思つた。こうしてハーバードでは法学部のジェローム・コーヘン、経済のドワイト・パーキンス、それに私の三人が選ばれました。

そこで二年間ハーバードで奨学金をもらつて中国のことを勉強し、あと一年は香港に行きました。大陸からの難民や一時帰国者と接触できたからです。

橋爪 その頃は、中国の研究は、材料が手に入らなくて大変だったでしょう？

ヴォーゲル 言語や歴史など、背景を勉強するのは問題がなかった。現代中国を勉強するのに困りました。新聞と雑誌をまず読みます。共産党の宣伝記事でも、中国のものの考え方や、政策を国民にどう説明しているかがわかる。いまだんな社会問題があるか書いてなくても、よく読めば、こういう問題を解決したと書いてある。そういう問題があつたことにな

ります。運動があれば、その対象が何かと考へた。もうひとつのソースは北京駐在の外交官で、英国、カナダなどの外交官に中国の話聞いた。香港では、お手伝いが帰省したりすると、その情報を聞く。広東省から避難民が来れば、村の組織、仕事、生活ぶり、食べ物などについて話を聞きました。

橋爪 大躍進政策の失敗や、内部の路線闘争は、公表された資料などからだけでも十分想像できていたのでしょうか？

ヴォーゲル かなりつかめていた。五八年十二月、中央委員会の会議のあとの翌年の発表は、五八年夏とかなり調子が違う。新聞には、農民が木の皮を食べたと書いてあり、これは相当ひどいと。六一年には新しい政策がたくさん出てきた。橋爪 それで、文化大革命になります。これはどのようにみていましたか。

ヴォーゲル 六二年の秋に「社会教育運動」がありました。資本主義の思想に反対する運動で、六一年とまた違う。六五年の秋に文化大革命が始まり、新聞を讀

んだら六二年と内容はあまり違わない。大変な事態だとはわからなかった。六六年秋から壁新聞が出て、香港に写しが集まるのをコピーで読みました。これはすごいと驚いた。鄧小平、劉少奇らに反対し、陶铸(元広東省書記長)も批判されたとある。内部闘争がそこまで激しいとは想像していませんでした。

当時日本の記者が北京にいて壁新聞が読めたので、彼らからも情報を集め、早大の新島淳良さんから毛沢東派の人とも会つた。ソ連の外交官で中国専門家のガレノビッチという人(KGBだと思ふ)とも意見交換をした。何でもしました。

橋爪 日本でも、文化大革命の実態がわかるのにずいぶん時間がかかりました。ヴォーゲル 私も六六年の秋まで、よくわかつていませんでした。壁新聞が出たから、党内闘争だとわかつた。ハーバードでは当時、学生がベトナム戦争に反対して、私ら教員を批判しましたが、彼らは文化大革命を、思想闘争でいいことだとみていました。日本と同じですね。

橋爪 日本では、文化大革命がよくわかつていなくて、あとで驚くことになりました。まず、林彪事件。そして米中接近。どちらも起こるはずのないことだった。

七八年米中接近の舞台裏

橋爪 米中の関係修復は、アメリカ政府のごく一部で決めたのでしょうか、それともかなり広い範囲で議論があつたのでしょうか。

ヴォーゲル ごく限られた範囲で決めたことです。キッシンジャーは秘密を守る男で、国務省にも話がなかった。橋爪 ヴォーゲル先生も知らなかった？

ヴォーゲル 想像すらしなかった。いま思えば、キッシンジャーが北京に行く前二度ほど会う機会があつた。一度は彼がハーバード大学に戻つてきて、ベトナム戦争に對する意見を聞き、あと毛沢東や周恩来などの人物をどう思うかなど中国について質問した。そのときには、北京行きを決めていたんでしょね。

その後ワシントンでも学者の意見を聞き、日中関係への影響についても意見を求めた。当時、佐藤・ニクソンの間がぎくしゃくしていたので、ライシャワーや私も加わって八人ほどの会議がホワイトハウスで開かれた。キッシンジャーは、七一年までアメリカは中国の国連加盟に反対してきたが、国連総会の形勢は流動的で、来年は阻止できなくなるだろう。どうしたらいいかと細かく質問したが、質問の本当の意図は説明しなかった。

橋爪 米中国交正常化が、二十世紀の重要な分岐点でしたね。いっぽうではソ連を追い詰め、崩壊へと導くことになったし、もういっぽうでは中国が改革開放政策に踏み切る条件をつくり出した。アメリカの国益を追求するため中国と結ぶことは、重大な選択でしたね。

ヴォーゲル 政府はそう考えていたと思いますよ。当時私は中国の国内問題を研究していて、外交を専門に考えていたわけではないけれども。

あとで考えると、転機になったのは六

を正式に承認します。開放政策をアメリカは歓迎しました。三中全会の後すぐ、鄧小平はアメリカを訪問します。正式の外交関係があるとならば、かなり違ってくるのです。開放しやすい状態だったことが大事だと思います。

橋爪 私が鄧小平だったら、アメリカの保証もないのに、とても怖くて国を開くことなどできなかったでしょう。

ヴォーゲル 七八年五月にアメリカの役人数人が北京を訪ねて、国交交渉をしたときに、中国との貿易拡大や開放政策を歓迎するという話も出たのです。

日本は七二年から北京に大使館を置いていたが、アメリカは代わりに連絡事務所を置いていた。そこにかんりの大物、前英国大使のデビッド・ブルースや、ジョージ・ブッシュらを送りこんでいました。北京の指導者は、彼らと会えばずいぶん細かい話もできた。開放政策をとる前に、よく彼らと相談したはずですよ。

橋爪 中国の要人と会う機会も多いと思います。鄧小平とは会われましたか？

九年、中国とソ連の国境紛争でした。珍宝島で二回衝突があり、二回目はソ連が中国領内に侵攻して威嚇したのです。中国側の被害も大きかった。そのあと中国は、主要な敵はアメリカでなくソ連だと考え始めた。アメリカよりも中国の政策から始まったことだと私は思う。

橋爪 すると、中国側から先に関係改善のサインがあった？

ヴォーゲル 七〇年にはカナダと関係改善をはかったし、ヨーロッパの各国とも少しパイプができた。ソ連との紛争以来、中国の政策はかなり変わったのです。

橋爪 いったん米中が結ぶとなると、大幅な調整が必要になりますね。

ヴォーゲル 日本では、キッシンジャーが事前に何も連絡しなかったと不満がありました。国務省も同じでしたよ。キッシンジャーはリークを警戒していた。

当時は日本政府のリークも多かった。リークがあつて台湾ロビーがワシントンで動けばだめになる。七八年に中国を正式に承認する際も、同じく秘密でした。

ヴォーゲル 残念ながら、会いませんでした。彼がワシントンに来たとき、かなり近づいたけど握手はしなかった。

橋爪 それは残念ですね。会っていれば鄧小平はきっとヴォーゲル先生に興味を示して、話はずんだことでしょう。

ヴォーゲル 趙紫陽にも会いたかった。彼は長いあいだ広東省にいましたから、私がかんり親しくなったのは、江沢民、朱鎔基、劉華清といった人びとです。

橋爪 改革開放当初というより、現政権の主要な指導者たちですね。

ヴォーゲル 九三年にクリントン政権に参加する前は、広東省の指導者と会ったことがあるだけです。北京の指導者と会ったのは、その後です。

橋爪 中国の指導者たちについて、どういう印象をお持ちですか？

ヴォーゲル 鄧小平はすごく強い人間、ワンマンです。中小企業にたとえて言えば、鄧小平は創業者の社長。その後の江沢民、朱鎔基はサラリーマンあたりだ。革命世代ではなく、受け継いだ世代です。

橋爪 米中の握手は合理的な選択でしたが、中国はそのことで説明に困りませんでしたか。共産主義を掲げながら、資本主義の国と手を結ぶのですから。

ヴォーゲル でも、毛沢東も賛成したことです。当時は毛沢東の「新路線」といいました。第二次大戦当時、毛沢東はアメリカと接触しようとしたが、アメリカの態度が悪かった。こんどは歓迎する、といった調子でしたね。

中国指導者たちの素顔

橋爪 その毛沢東が、七六年に亡くなるまで、すぐ四人組が逮捕される。過渡期を経て、鄧小平が実権を確立。七九年には改革開放政策がスタートします。これらはすべて中国独自の動きでしょうか、それともアメリカからの働きかけが、少しでもあつたのでしょうか。

ヴォーゲル 七八年十二月の有名な第十一期三中全会で、鄧小平路線が確立しますが、同じタイミングでアメリカが中国ね。改革開放以前、市場経済は勉強できなかった。彼らにはだいたいが工学部の出身。工学部の出身者は、実務的で、問題解決指向が強いのです。文革以前に大学に入学しているので、頭がよく学力が高い。文革をくぐり抜けているので、政治の経験もある。よい国家・社会をつくるため、理想のため、献身的に働く。中国の指導者はまだそういう純粋なところを残している。

もうひとつ、西洋に学ぶ気持ちがあつても強い。指導者の多くは子どもや孫たちを海外、特にアメリカに留学させている。

橋爪 すると、信頼もできるし話も通じる、心が通うという感じでしょうか？

ヴォーゲル 彼らは頭がいいし、自国の国益を考え第一、第二と優先順位をつけている点はアメリカ政府の代表と似ている。だからきちんと話せば、通じる。

天安門事件と台湾問題

橋爪 八〇年代、中国の改革開放が順調

に軌道にのったかに見えた矢先、天安門事件が起きます。日本もアメリカも驚いて、関係が冷え込んだのですが、これほどのように影響を残しましたか？

ヴォーゲル 天安門事件の背景ですが、改革開放下で、どこまで自由を認め、どこまで社会の安定を重視するかは決めるに問題なものです。八九年の事件前、趙紫陽と李鵬では見解が異なっていた。もっと早く片づければ、あれほど大きな事件にはならなかったと思う。

流血がテレビや新聞で報道されると、アメリカ国民はショックを受けた。とにかく軍隊が発砲して学生を殺したのは悪いと世論が一致したので、ブッシュ大統領は中国とのよい関係を維持したくてもできなかった。九二年の大統領選挙で、クリントンがブッシュ政権の姿勢を、中国に甘いと批判して票をのびました。

橋爪 長期的にみれば、中国は成長を続ける巨大な市場で、中国とアメリカが結ぶことは双方の利益であるし、世界の安定のためにも欠かせない。しかし当面、

中国の政策や国内の体制は、アメリカとく異なるも多く、矛盾をはらんでいる。ヴォーゲル はい、大賛成。あとひとつは、台湾問題ですね。台湾は、五〇年代からアメリカに大勢が留学して人脈をこさえ、議会に強力なロビーもつくった。

九四年に李登輝が訪米したとき、そのロビーが動いて台湾に最新の武器を売ることになったので、北京が怒ってしまった。橋爪 ロビーの影響力の根本には、台湾がひと足先に民主的な政治体制に脱皮したことがあると思う。国民党はもともと独裁的な政権だったわけですが、中国人でもやればできるじゃないかと、アメリカに強く印象づけた。

ヴォーゲル 八七年以前、アメリカのベラル派や政府の人びとは台湾にあまりよい気持ちをもっていなかったのです。八七年に野党の存在を許し、軍事政権をやめたのが大きかった。そのあとの天安門事件で、いつそう違いが際立った。橋爪 おとしし台湾に調査に行きました。が、人びとが口をそろえて強調していた

度などの改革を進めている。これらは日本でも問題でしょうけど、中国には財源が足りない。制度をつくるのもむずかしいし、組織や法律をつくるのも大変で、あと二〇年、三〇年かかるのです。

腐敗問題を考えてみると、役人の給与は低いので、ほかの収入がないと生活が苦しい。もしも腐敗を厳しく取り締まれば、反撥が大きいです。二〇年たつと、生活水準が高まるので、厳しく腐敗を取り締まれるようになる。いまは目にあまるケースの摘発が精一杯なのです。

もうひとつ私が楽観的なのは、中国の留学生たちを見るからです。ハーバードにも五〇〇人ほどいますが、二〇年前まで社会主義だった国からあれば優秀な人間が育つのかと感心します。

中国の新聞を読んでも、新しい理論がいろいろ出ていてとても面白い。中国共産党のトップは、現在の政策に反対しないが、個人の考えは柔軟で、いろいろ先のことまでよく考えています。ある中国人の教授が去年、中央の共産党学校で勉

のは、民主化に対するアメリカの影響力でした。民主的な政権となった台湾をアメリカは見捨てることができないうし、北京を牽制する手段としてもアメリカの役に立つのではないのでしょうか。

ヴォーゲル ある台湾人は、アメリカは我々を見捨てた、とも言った。アメリカの政策には矛盾もあるのです。アメリカ国民には台湾との関係も大事です。兩岸問題を解決してほしいが、武力を使つては困る。それはアメリカ国民の一致した世論だし、政府の態度でもある。いっぽう台湾は、ホワイトハウスや国務省に何か話を持ち込んで断られると今度は議会に持ち込み、話をこじらせてしまう。

私個人の考えですが、北京はこれからもっと力を増してくると思う。アメリカの中国との貿易額は数年前、台湾との貿易額を追い越した。今後その差はどんどん開くでしょう。軍事面のギャップも広がる。台湾の防衛力は技術も高く優秀だが、二〇年、三〇年先を考えると、北京は台湾を追い越すだろう。そうすると、

強したのですが、大学では議論しにくいようなことも、みな自信をもって議論をしていて、大学よりずっと面白いという話でした。

もちろん中国には、問題も多い。例えば、戸籍制度です。いま一億人ぐらい、戸籍なしに大都会に流入している人口がいる。国有企業の立ち遅れもひどい。沿海地域と内陸との格差も大きい。社会問題は山積していて、解決には時間がかかると。それでも私は、どちらかという楽観的です。

台湾は北京に反対する政策をいつまでも続けるべきだろうか。ある時期北京と話し合つて、協議をまとめる必要があると私は思う。

米中の友情

橋爪 今後数十年という、少し長い目でみて、中国はこれからどんな国になっていくと想像されますか？

ヴォーゲル 中国の指導者を見ると、最近の二〇年間、世界を知るようになってからの変化は非常に速かったのです。でも根本的な変化が定着するまでには、数十年かかる。法律を外国から取り入れるのは簡単でも、地方政府がほんとうに新しい法律で動くまでに、数十年かかる。

いま新しい社会福祉制度、住宅、医療制

〈室内庁御用〉

にっぽんの味
山口県特産かまぼこ

白銀
ハクギン
秋芳
しゅうほう

白銀本舗
株式会社 杉本利兵衛商店
山口県防府市三田尻一丁目13番16号
TEL (0835) 22-0391(代)



三島由紀夫VS東大全共闘 1969-2000

オヤジたちの熱い体験



三島由紀夫他著

大3郎に小松義彦を配り、民俗資料として貴重な発言も随所にあつて、読者の尊重によりちやちやに豊かな手紙になり得る内容になつてはいる。でもこのシトたち、うん、当時の東大生ってやっぱいろんな意味ですごかったな。

マシメな話、「三島」を自明のものとして来たという書、こつかり熱く語れちゃう、あんたたちのそのカルチエ自体って何？ という問いが、最も必要なのだ。それなくして、真の意味での「歴史」の側はこのオヤジたちの体験は投げ返されることはない、彼らが幻視する「若者」に理解されることもない。だからひとまず笑う。笑ひ飛ばしてネタにする。それが今、おそろく一番健康な読者としての態度だ。

(慶信書店・二八〇〇円) 民俗学者 大月隆寛

存在に笑わせていた橋爪。いや、ほんとに。表紙の悪句からしてすごい。「伝統の激論会 三島VS全共闘」(1969)、そして三島の自決(1970)から三〇年、『左右対立』の図式を超えて両者が共有した根源的な問いは、たにゆきの三〇年関知されてきたか？ ともって、赤い太陽朝体で「左右対立の彼岸に立つ。近代の超克」よきた。ひと昔前のタマカンみてえ。で、中をめぐると、まず当時の討論会を学生側にした方々が顔写真入りで回顧の座談会をなさつていて、何よりこれが中身のほとんどであり、かつ最大のウリだ。いずれも五十年代、木村修、芥正彦、浅利誠、小阪修平といった面々が、いや、その顔写真がみんなすげーのなんの。良くも悪くもこの三十年、この三ツポンを交えてきたオヤジのツツラ、じやあない。聞き手には橋爪

橋爪 私が少し悲観的に思うのは、近代化の過程で日本も同じような時期を経験したと思うからです。遅れた農村に人口があふれ、一部に進んだ産業があるが、所得格差が大きく中産階級が未成熟である。こういう時期、日本にはひ弱な民主主義しか育たず針路を誤つたのですが、中国でも中産階級がまだ十分に育っていません。そこで、共産党の役割が大きいことはわかるのですが、あくまでも過渡的な存在なのではないでしょうか。

おわりに

ヴォーゲル教授との対話を通じて、ダイナミックに展開する米中関係の姿が、ひしひしと伝わってきたように思うのはひとり私だけだろうか。

巨大な中国が発展するためには、膨大な資源や資本と、広大な市場が必要である。日本は小さすぎてそれを提供できない。中国が当面重視すべき相手はアメリカである。二十一世紀、米中両国が国際社会の軸となつてゆくのは必然だ。

ヴォーゲル教授は、激変する国際社会で中国の針路を明確にさし示し、大胆に改革を進めた偉大な指導者鄧小平についての著書を執筆中である。パーソンズゆずりの社会システム論を活かした、本格的な研究書の登場が待ち遠しい。

(橋爪)

橋爪 中国はたしかに国内問題で手一杯なのですが、それだけに、国際社会に受け入れられ、アメリカや日本など関係国の支持がほしいところでしょう。

アメリカからみて中国は、将来、頼もしい友だち、価値観を共有した同盟国となるのでしょうか、それともまだ注意が必要な国なのでしょうか。

ヴォーゲル アメリカ政府が、中国を早い時期に同盟国とみなすことはないでしょう。民主主義の国ではないし。ただ、中国人とアメリカ人が、個人的に友情を深めていくことはできる。国民と国民が友情で結ばれうるのです。

ハーバード大学でも、医学部、法学部をはじめ、あらゆる分野で中国との交流がものすごく多いのです。

橋爪 日本など目じゃないですね。

ヴォーゲル 中国は人口も多いし、華僑もある。島国根性と大陸のおおらかさというか、国民性の違いもあります。中国は広くて、中国のなかにもよそ者がい

ただ戦争は、いまの中国には考えられない。国内の混乱はありうるし、愛国主義が強まる可能性もあるでしょう。でも外国と戦うことはないと思う。

台湾を攻撃する危険はあると思う。南沙諸島は、その可能性が少ない。